

付編

玉体横穴群出土人骨について

山口 敏 (国立科学博物館 人類研究部)

1号横穴

脳頭蓋の小破片数点と歯16点が出土している。

頭蓋片には後頭骨と側頭骨の一部が含まれている。

歯は、切歯4・犬歯3・小臼歯4・大臼歯5からなり、歯根はほとんど保存されていない。1個体分と考えられる。咬耗は第1大臼歯では2度に達しているが、概して弱く、全体としてはラヴジョイのD段階(20-24歳)に相当する。残存している歯はカリエスは認められない。上顎の切歯はシャベル形を呈する。

2号横穴

69点の骨片あるいは歯が玄室の中央部と奥半分の壁際で出土している。各資料のとりあげ番号を実測図と照合してみると、骨の分布に規則性はなく、解剖学的配列も個体ごとのまとまりも認められない。また、数種の獣骨等も混在している。

成人女性の大腿骨が4個体分あるほか、成人男性の頭蓋冠破片が1個体分あり、さらに6歳前後の小児と4歳前後の幼児の顎骨が保存されているので、個体数は少なくとも7個体を数えることになるが、骨は断片的なものが多く、保存量は比較的少ない。

ある程度まで保存されている頭蓋は、熟年女性頭蓋1例のみである。頭蓋底と顔面は破損している。脳頭蓋の3主径は正確には計測できないが、最大長は174mmと推定される。頭頂結節がよく発達し、頭蓋冠の上面観は類五角形。前頭縫合が存在するが、約4分の3は閉鎖している。3主縫合もそれぞれ走行の半ば前後が閉鎖している。右側頭骨の関節結節に関節面の損耗がみられる。眼窩の上壁に、ごく軽度のクリブラが認められる。眼窩上縁孔は左だけに存在する。顔面骨格では左右の上顎骨の破片しか保存されていないが、上顎体前面は深い陥凹を示し頬骨下稜は細い稜をなしている。歯槽部が失われているため、全貌は明らかでないが、歯の脱落にともなう顔面の退縮変形があったものと推定される。右の上顎洞壁には病的凹凸が認められ、上壁は病的穿孔によって眼窩底に通じている。

ほかにもう1点、比較的保存のよい成人女性前頭骨がある。前頭縫合は、ない。この場合も左だけに眼窩上縁孔が見られる。クリブラはない。

成人男性と考えられる頭蓋片は、後頭鱗片と前頭鱗片だけで、とくに記すべき所見はない。おもな成人女性下肢長骨の計測を表1、2に示す。

大腿骨は骨幹の計測できるものが5点保存されているが、大長や全長を計れる例はない。骨幹上部の横断示数はいずれも扁平型ないし超扁平型に属し、骨幹中央部も後面の付柱構造が弱く、矢状径が横径を凌駕する例は一例もない。これらの対には頸部前面の腸骨圧痕と、骨幹上部後面の第3転子が認められる。骨幹径の計測できる脛骨が3点あり、いずれも女性と考えられる。そのうち1点は最大長が300mmと推定され、藤井法による身長推定値は144cmである。骨幹中央部の横断示数は3例とも厚型に属し、断面の形は2例がヘルデリカの3型(三角形)、1例が4型(4辺形)である。

個体数の割合に骨の保存量が少なく、遊離歯がほとんど出土していないことと、ウマ、イヌ、

ウサギ、トリの骨が少量ずつ人骨に混在していることから、これらの骨は一次埋葬ではなく、骨化してから持ち込まれたものである可能性が考えられる。

まとめ

1号横穴では、比較的若い壮年1個体分と思われる遊離歯と少量の頭蓋骨片が、出土した。

2号横穴では、少なくとも7個体分の断片的人骨が少量の獣骨片および鳥骨片とともに出土した。人骨の内訳は成人5（男性1、女性4）、小児1、幼児1である。人骨の保存量は個体数の割に少なく、遊離歯もほとんど出ていないので、1次埋葬ではないと考えられる。

（人骨以外の骨片の同定に関しては、富田幸光博士のご助力を頂いた。）

表1 成人大腿骨計測値

骨番号 性・側	H 1 ♀ 右	H41 ♀ 左	H37 ♀ 左	H38 ♀ 左	H66 ♀ 左
骨幹上部最大径	30.5	30.5	28	28	29
骨幹上部最小径	19	19.5	20	21	20.5
上部横断示数	62.3	63.9	71.4	75.0	70.7
中央横径	26	-	25	23	(26)
中央矢状径	21	-	24	23	(24)
中央横断示数	80.8	-	96.0	100.0	(92.3)
中央周	74	-	76	72	(79)

表2 成人腿骨計測値

骨番号 性・側	H27 ♀ 右	H31 ♀ 右	H49 ♀ 左
最大長	-	-	(300)
中央横径	24	25	24.5
中央矢状径	19	19.5	18
中央横断示数	79.2	78.0	73.5